所長挨拶
平成 29 年度臨時宇宙理工学合同委員会
平成 30 年 3 月 12 日（月）

前回の理工学委員会で、来年度予算の危機的状況をご説明し、研究総主幹より、予算の平均３０％削減を含む対応案について説明した。その後、宇宙政策委員会委員長代理の松井孝典先生のご尽力で、対応策を練り、内閣府、宇宙政策委員会、文科省、JAXA 首脳部の理解を経て、来年度に関しては、実行予算のかなりの部分を回復できた。しかし、回復した分を補正予算で見える化する必要がある。というのは、日本の財政制度は前年度実績主義なので、来年度予算は補正含めて 110 億レベルから 30 億増やして 140 億レベルに上げるということが、FY31 の予算を考えた時に重要である。したがって、JAXA と政府関係部門には、来年度予算についてまだ対応すべきことがあるという認識でいる。

今回の財政危機の背景については、前回の理工委員会で説明したが、この騒動の結果、良い面もあったと考える。すなわち、宇宙科学・探査に対する予算支出が一貫して減る傾向にあり、このままでは我が国の宇宙開発利用を支える基礎体力が失われ、産業利用や安全保障分野での活用も含め、我が国が高い水準の宇宙開発利用活動を維持していくことが困難になるとの強い危機認識が、内閣府・政策委員会・文科省に共通に生じたことである。ＪＡＸＡ内においても、この危機意識が共有されることを希望している。大学の重要性に関連しても、宇宙科学に関するこのような重要性を再認識し、大学や JAXA/ISAS における宇宙科学研究、技術開発を着実に推進し、併せて人材の育成を図っていくことが不可欠であることも改めて認識された。

所長に就任して５年がたち、その前の理学委員長の２年を含めると、7 年になる。このような危機的状況のなかで、次期所長にバトンタッチすることになる。これまで、大小さまざまな所内の改革、JAXA との関係改善、政府とのコミュニケーションの増大を行ってきたが、これは、今後その成果が明らかになると信じている。次期所長の元で、今の方向性を発展させれば、大きな成果が生まれる。

５年間の活動の成果として、代替機、SLIM, MMX, DESTINY+、SPICA, 次

の小型ミッション選考、LiteBIRD と Solar Power Sail が候補の戦略中型２号機の来年度選考、NASA の彗星サンプルリターン CAESAR などの立ち上げがあり、今後のミッションは活況を呈していることが挙げられる。ISAS ニュースの新年の所長所感として強調したが、これらのミッションを、ひるむことなく実現・成功していかなければ、世界の競争のなかで我々は埋没していくし、外国から協力の声もかからなくなる。このためにも現在回りだしている探査ミッションでの理工の協力は本質的に大事だ。

FY31 の財政危機について言えば、宇宙研と学術コミュニティの連携により、これらの将来ミッションをさらに魅力的にし、誰が見ても重要であると認識していただくことが、予算獲得の近道であることを強調したい。

やり残していることとして、大学・外部の研究所との協力関係がある。宇宙研は研究開発法人にあって大学共同利用機関としての役割を果たしてきた。宇宙研の成果は大学や外部の研究所なしではありえないことは、常に認識している。そうでありながら、宇宙研の課題や改革には、多くの人の関心が集まるが、大学の抱える課題については置き去りにされているという思いが私にはある。一例をあげると、SPICA の観測機器の心臓部は、大学中心での長期期間にわたる開発が必要である。大学の一研究室がＪＡＸＡの主要ミッションの成否を握った部分を長期にわたって担うという状況は、大学の立場にたった改善が必要である。

このように解決すべき点が多々ある中で、宇宙研と学術コミュニティのコミュニケーション・意思疎通の場である研究委員会は極めて大事で、これまで５年間のご協力に感謝申し上げたい、

今年度末で任期が終わるが、５年前までは国立天文台におり、外部から宇宙研と協力してきた。このたび、国立天文台に異動することになり、再び、外部の目線で宇宙研・JAXA とお付き合いすることになる。次期所長を中心に、所員と学術コミュニティが協力して、宇宙研をさらに発展していただけると信じている。宇宙研および理工学委員会の今後の活躍と発展に多いに期待したい。どうもありがとうございました。